

船井情報科学振興財団留学報告書

第七回

Department of Economics, Northwestern University

村上愛

コロナウィルスのパンデミックで世界が一変してしまっただが、私は現在博士課程における重要な局面にさしかっている。いよいよ博士論文の執筆に本腰を入れる段階になったのだ。

Northwestern 大学では 3 年生の終わりに博論審査委員会の構成を決定する。これをもって正式に指導教員が決まるのだ。経済学では他分野と異なり、研究室のようなものは存在しない。制度上、少なくとも 3 名の教員から審査委員会は構成されるが、自分のやりたいテーマに合わせて自由に構成することが可能だ。私は、経済史の大家 Joel Mokyr に主査をお願いする予定であるが、副査についてはまだ検討中である。

博士論文のテーマとして、私が現在考えているのは近世以来の科学的態度が歴史上、弱者をどのように生み出し、扱ってきたかという問題である。一見すると経済学の対象と思えないテーマのように思われるかもしれないが（実際今までこのような研究はない）、経済学の体系に位置付けることは十分可能だと考えている。学問体系の話は抽象論になりがちだが以下にかいつまんだ説明を試みる。

経済学はそもそも経世済民という語が由来であるように、根源的には人々の厚生を考える学問であり、日常言語で通常意味するところの経済活動やお金にまつわることだけではない（英語の Economics の語源はオイコスとノモスという二語であり、共同体のあり方という意味である）。狭義のお金にまつわる経済活動というのは人々の厚生に関わるもののうちの一部に過ぎない。定量的、定性的に分析がしやすいからこそ学問対象として経済学を中心に鎮座しているといってもよい。弱者や差別に関する研究はまだまだ発展途上であるがこれらは当然経済学の学問対象である。

また、経済学において科学技術の発展が現在の経済成長において必要であると認められて久しい。現代において、もはや科学技術に依らない生活は想像もできない。しかし、科学技術の進展が誰に対しても平等に恩恵をもたらしたわけではなく、時にはディストピアの様相を呈することもまた歴史の示すところである。私の研究では、個

別の発明などではなく、科学的態度、すなわち合理的に物事を批判するという一見すると非の打ち所がない科学の根底に横たわる考え方が社会に与えた負の影響を分析しようと考えている。

全く新しいテーマを学問体系に位置付けるためには上記のような抽象的な議論も必要だが、以下で現在私が取り組んでいる研究をごく簡単に紹介したい。医者の方の推奨の下に実施される隔離政策についての歴史である。かつて、日本では戦前からハンセン病患者の隔離を行い、1996年まで強制隔離を継続した過去があるのはご存じの方も多いただろう。現在ではハンセン病の感染力は非常に弱いことが知られており、全く隔離は必要ないのだが、当時はそう考えられていなかった。なぜならハンセン病の専門家が隔離は必要と主張していたからだ。日本で隔離政策を推し進めた光田健輔という医者はハンセン病の感染力を非常に強力だと考えており、それが故に隔離政策を進めることだけがハンセン病を根絶するための唯一の方法だと信じていた。光田の主張に従い、政府は患者を強制的に隔離した。それだけでなく社会全体でハンセン病隔離のためのキャンペーンを行い、患者狩りも行われた。そして、いったん隔離されると多くの場合患者は終生を施設内で過ごさねばならなかった。医者という専門家が「科学的知識」に基づいて隔離は必要だと言うと、それを覆すことは他の専門家にしかできない。そして一度隔離が定着すると、今度は患者に対する差別や偏見まで社会に広がってしまう。研究では、法的構想力を直接持たないにもかかわらず、医者という専門家が言葉で主張することによって、社会に属する人々の行動を差別的なものに変容させ得ることを数学的に証明した。

ハンセン病の場合、現在の視点からすれば誤った理由によって隔離政策が長引いていた点は強調される。では、仮にハンセン病の感染力が実際に光田の主張したように強かったならば、病気を根絶するために個人を一生涯隔離することは正当化されるのだろうか。

今回のコロナ対策でも罹患していることが判明した場合は、一時的であれ隔離措置をとられ、日常生活に大幅な制限を加えられる状況である。このような科学的主張による平時では考えられないような非人間的な行動がなぜ容易に生じるのか。それは自然科学の対象の多くが物質であるなか、医療は人間を対象としているためだと考えている。自然科学的な発想でいると、コロナウィルスという物質の隔離をしようとするとき、物質への対処方法だけを考えてしまい非人間的対応をしがちである。しかし、ウィルスの宿主が人間である限り、それは社会的な問題を必ず伴う。かつてのハンセ

ン病のように、病気の根絶のためなら病人は社会から断絶されて構わないという言説は成り立たない。自然科学的アプローチの限界がここにあると思われる。

幸い、このような非人間的な側面を科学がもつからといって反知性主義や反科学主義に陥る必要はない。かつて哲学者のヒュームは、自然科学とは別に、「人間の科学」が必要だと説いた。コロナウィルスのような病気の問題は自然科学的なアプローチだけでなく、経済学のような社会科学的アプローチこそ必要とするのである。そもそも科学とは、それ以前の哲学や宗教などに根差した知識体系と異なり、過去の専門家の言説を覆すことが許された体系であると Mokyr は指摘していた。つまり現在主張されている内容は専門家と呼ばれる人々が相互に認め合うという仕組みによって信ぴょう性を担保しており、誤りを指摘して修正することで科学は成り立っている。同時代に生きる（社会）科学者として批判を続けることは、科学に基づいた人権抑制の問題すらも科学的体系に取り入れることが可能だ。

一方で、このような人権にも関わるような事態を平然と社会が受け入れたことは見逃せない。その根底にあるのは科学的体系にある信頼である。我々の多くはコロナウィルスを見たことはないし、まして感染する現場をその目で見たわけなどない。しかし、我々は感染症の専門家の主張を信じ（あるいは政府は信じ）、隔離政策をとっているわけである。この点においては科学もひとつの宗教にすぎないということを忘れてはならないだろう。科学信仰はそれ自体、社会への影響力をもっているということだ。

博士論文だけで上記のようなテーマをやりつくすことはできないだろうが、まずは最初の一步として丁寧な仕事をしたいと思っている。主査も「一緒に大きな分野にしよう」と激励してくれた。興味を持たれた方にはぜひ論文で読んでいただきたい、と言いたいところだが、あと 3 年は仕上がりそうにない。夜な夜な「はやく論文を仕上げるように」と主査に催促される夢を見ては焦りを募らせる毎日である。

